

ベトナム語教育と CIS プログラム



海外交流

清水 政明*

Coupling Internship (CIS) Program
in the Context of Vietnamese Language Education

Key Words : Vietnamese language education, Coupling Internship (CIS) Program

はじめに

大阪大学外国語学部の前身である大阪外国語大学外国語学部でベトナム語教育が始まって早40年を経た今、ベトナム語教育の手法やコンテンツも急激に多様化しつつある。一時代を画したコンピュータ支援型言語教育(CALL)も今や同様の手法やコンテンツがスマートフォンで実現可能であり、むしろウェブ上に溢れる語学素材をいかに自主的に取捨選択し、自らの学習に活かしてゆくかを指導することが我々語学教師の仕事と言っても過言ではない。学習環境や素材が多様化すると同時に、大学が提供する語学関連のプログラムも多様化しつつある。例えば、大阪大学が提供する「マルチリンガル・エキスパート養成プログラム」¹⁾や「未来共生イノベーター博士課程プログラム」の一部をなす「未来共生多言語プログラム」²⁾等は「多言語に精通し、現代世界の喫緊の課題に取り組む専門的な知識を備え、グローバルに活躍できる人材を養成すること」を目的とし実施される試みで、外国語学部を擁する大阪大学ならではのユニークなプログラムである。中でも2013年度より5年間実施されたカップリング・インターンシップ(以下、CIS)プログラム³⁾は、文系と理系の枠を超えた文字通り異分野融合型プログラムで、外国語学部と工学部という一見接点を見出すこと自体困難と思われる分野同士の学生が共通の

課題に取り組むという斬新なものである。本稿では改めてここ数年におけるベトナム語教育の変化を振り返り、その中でCISプログラムが果たした役割を振り返ってみたいと思う。

大阪大学におけるベトナム語教育

筆者が長年携わってきたICTを利用した外国語教育が学習素材の爆発的な多様性をもたらしたのは事実であり、本学外国語学部ベトナム語専攻においても、いかにウェブ上に溢れる学習素材を有効活用するか適切に指導することが重要な課題となっている。語学4技能の中でも、ベトナム語のような単音節孤立型言語にとってとかく困難なリスニングの練習を自律的に行おうとした場合、学習者が周知のコンテンツをベトナム語で聞きとる練習を積み、徐々に未知の内容へとシフトするという段階的練習が考えられる。その際、例えば日本発のニュースをベトナム語で発信するNHK World(ベトナム語)のコンテンツ等は非常に有用であり、そこでディレクターとして活躍するベトナム語専攻卒業生と連携を取りつつ学生へのコンテンツ提供に努めている⁴⁾。また、屈折型・膠着型言語とは異なり、統語論の中心が専ら「語(形態素)の配列」に集約されるベトナム語のような言語の場合、極端な言い方をすれば、「主語+動詞+目的語、被修飾要素+修飾要素」という基本語順と個々の語彙の意味を記した辞書が与えられれば、理論的には自律的な読解練習が可能なのはである。とはいえ、初級段階には最低限の句や語の切れ目、基本語順から逸脱する構造(例えば、名詞句)に関する情報は必須であり、それら基本情報と語の意味を与えて、文の意味を帰納的に理解できるような「日本人学習者に適した」ICT対応の教材を提供することも行ってきた⁵⁾。

このように特に自律学習を見据えた学習コンテン



* Masaaki SHIMIZU

1967年1月生まれ
京都大学大学院 人間・環境学研究科文化・地域環境学専攻 博士後期課程(1999年)
現在、大阪大学大学院 言語文化研究科 言語社会専攻 教授
TEL: 072-730-5282
FAX: 072-730-5282
E-mail: qingshui@lang.osaka-u.ac.jp

ツが徐々に整備される一方、外国語学部を擁する大阪大学の特徴を活かしたユニークな分野横断的プログラムも多数展開され、学習成果の発信方法自体にも大きな変化が見られる。とりわけベトナム語専攻が積極的にかかわってきた CIS プログラムは、これまでに類を見ない極めて独創的なものである。以下にその内容を紹介する。

CIS とは？

カップリング・インターンシップの「カップリング」が意味するところは2つあり、1つは文系（外国語学部・言語文化研究科）と理系（工学部・工学研究科）のカップリング、もう1つは日本人学生と相手国学生のカップリングである。つまり、背景の異なる4者の学生が2つのグループに分かれ（計8名）対象国で活動する日系企業に赴き、引率教員の指導の下与えられた課題について実習、インタビューを重ね、最終的にその成果を英語で発表するというものである。5年間のプログラム実施中、ベトナムにおいては FUJIKIN BACNINH INCORPORATED、及び IHI INFRASTRUCTURE ASIA CO.,Ltd. にて、それぞれ2年と3年に亘ってお世話になった¹。前者は水道からロケットに至るまであらゆる種類のバルブを製造する企業であり、後者はハノイの日越友好関係を象徴するニャッタン橋（別名、越日友好橋）の建設に関わった企業である。インターン学生達は、事前研修を各大学で行い、異文化間コミュニケーションの基礎、日本の企業文化、相手国の文化等に関する基礎知識を習得し、あらかじめ設定された課題に対しいかに効率的に作業を進めるか十分に準備した上で、移動期間も含め計2週間のプログラムに参加する。課題に関する調査やインタビューに加えて、朝礼への参加、安全講習を経た上での鋼材のカッティングや溶接の実習、各レベルでのミーティングへの参加等も含まれており、企業の事業内容を総合的に理解できるよう工夫された優れたプログラム内容となっている。ベトナムの場合、これまでに設定された課題はいずれも社内におけるコミュニケーションの問題にかかわるものであった。上記2社のようにトップ数人が日本人で、各部門のマネージャーも

含めてその他ほぼ全員がベトナム人という人員構成の場合、トップダウンの指示、ボトムアップの各種報告（改善案を含む）をいかにスムーズに行うかということが大きな問題となり、海外で事業を展開する企業にとって永遠の課題であると同時に、正に外国語学部の学生が将来その存在意義を十二分に発揮できる重要な部分でもある。したがって、上記2社のように社内言語が日本語や英語の場合に生じるであろう様々な問題をあらかじめ想定し、それを解決する方法を模索するという形で実習が進められた。

以下では、上記プログラムに引率教員として5年間参加した筆者の目から見た CIS プログラムの意義と、そのベトナム語教育における位置づけについて述べたい。

ベトナムにおける CIS の意義

CIS プログラムの意義を一言で言うならば、学生時代に各自の専門分野に関わる海外の企業で、教員指導の下実習を受けられるということに尽きるが、それを外国語教育という文脈の中で見るとき、更に大きな意義を見出すこととなる。ここでは、インターンに与えられた課題とそれを取り巻く実施国の事情、及びインターン各自の背景（母語と専門分野）という2つの側面から考えてみたい。

上述の通りいずれの課題も社内コミュニケーションに関わるものであり、海外で事業を展開する日系企業にとってそれがいかに重要であるかを物語っている。また、コミュニケーションの問題を考えるに当たり言語の問題を避けて通ることはできない訳で、外国語学部の学生が果たしうる役割も自ずと大きくなる。背景として、多くの現地社員を抱える海外の日系企業では少人数の日本人トップがいかに効率的に各レベルのスタッフとのコミュニケーションをとるかが作業効率に直結する重大な問題となる訳だが、それが外からは見えにくいというのも事実である。それは社内言語をどうするか、通訳を常駐させるか、といった問題とも関係する。殊に実施国ベトナムにおいては、英語・日本語学習熱が年々高まってゆく中、早くも初等教育で英語・日本語が教えられるにもかかわらず、実用的な運用能力を習得するにはやはり別途の投資が必要という部分は日本と変わらない。更には、日本語にせよ英語にせよ、互いの母語である日本語とベトナム語が言語類型論的にあらゆ

¹ 2社の周到且つ献身的な協力には唯々頭の下がる思いである。ここに深謝申し上げる次第である。

る面で正反対の特徴を有することが、互いが話す外国語の相互理解度を低めているのも事実である。例えば「互いの英語を理解するための手引き」という興味深い冊子を外国語学部のインターンが作成したことにもその問題が読み取れる。また、マネージャー・リーダーレベルとワーカーレベルの外国語能力には大きな開きがあり、現場で働く人たちの生の声を聞くにつけ、それをいかに日本人のトップに伝えるべきかをインターンたちは苦慮していた。

課題がコミュニケーションの問題であるとはいえ、実習そのものは日々の現場での作業体験を通じたインタビューに基づくものであったから、体験した内容を共有し整理する上では工学系インターンの役割が重要であった。もちろん全ての理系学生が企業の専門分野に精通するわけではなく、むしろずれる場合がほとんどであったが、外国語系インターンの理解を助ける上で不可欠の存在であった。また、英語を社内言語とする企業では、英語のみで全てのコミュニケーションが成り立てば、外国語系インターンの出番はないとも考えられるが、議論が深まれば深まるほど、母語使用率が高まったことは事実である。つまり、コミュニケーション一般の問題を理論的に考えるというレベルではなく、インターン同士のコミュニケーションあるいは母語を異にする社員とのコミュニケーションにおいてもベトナム語の使用率が事実高くならざるをえなかった。

以上のような当初の予測をはるかに超えた様々な問題（特に言語に関する問題）に直面し、それをインターン同士が一つずつ解決する中で様々なことを学ぶわけであるが、実際にはインターン同士がぶつかることもしばしばであった。そこでも、企業内で起こるコミュニケーションの問題の実態を肌で感じるようになった。

外国語教育上の意義

実習期間を通じて各グループが設定した具体的な問題に対し、インターン自身が提示できる解決法の内容は実施年度により様々であった。ただ比較的スムーズに結論に至った場合というのは、社内の命令系統の中で末端（に近いところ）に位置するワーカーレベルの人たちからベトナム語で直接語られた意見をベトナムの言語文化の観点から分析し、日本の企業文化及びそれぞれの企業の事業内容といかに折

り合いをつけるかという段階まで考察が及んだ場合である。日本あるいはベトナムで学んだ経験のあるインターン同士が、経験した異文化体験と各自が学んだ言語文化の基礎知識を CIS プログラムという場で改めて相対化し、それを基に思い切った提案をする。それに対し引率教員が教員自身の専門に照らして適宜コメントし、更には社内の各レベルのスタッフに実現可能性を確認する。そして、その成果を最終発表で披露する。このプロセスがうまく運んだ時は大きな達成感を感じると同時に、CIS プログラムの意義をあらゆるフェーズで味わうことができた。これが正に異文化間・文理融合の一つのモデルであると言えよう。

おわりに

「グローバル人材」の定義は個々の文脈により様々であろうが、例えば、各自の属する文化圏以外の環境に一定期間身を置き、そこでその文化圏に属する人たちと一つの問題について共に考えた経験を多く有する人材はそう呼ぶに相応しいであろう。その経験が多ければ多いほど優れた人材であろうが、同時にその経験の質が重要な問題となる。その質を高める上で言語の問題は正に中心的課題であり、それが相手文化の理解に直結する鍵となるならば、自ずとその質は向上し、優れたグローバル人材の育成につながっていくこととなる。外国語教育において CIS プログラムが大きな意義を有した所以である。

参考サイト

- 1) マルチリンガル・エキスパート養成プログラム (MLE) <http://www.mle.osaka-u.ac.jp/about/>
- 2) 未来共生イノベーター博士課程プログラム「未来共生多言語プログラム」
<http://www.respect.osaka-u.ac.jp/curriculum/>
- 3) 広域アジアものづくり技術・人材高度化拠点形成事業－カップリング・インターンシップ (CIS) による実践型グローバル人材育成－
<http://www1.lang.osaka-u.ac.jp/ls/cis/index.html>
- 4) NHK World (Tiếng Việt)
<https://www3.nhk.or.jp/nhkworld/vi/>
- 5) 高度外国語教育全国配信システムプロジェクト「ベトナム語独習コンテンツ」
<http://el.minoh.osaka-u.ac.jp/flc/vie/index.html>